

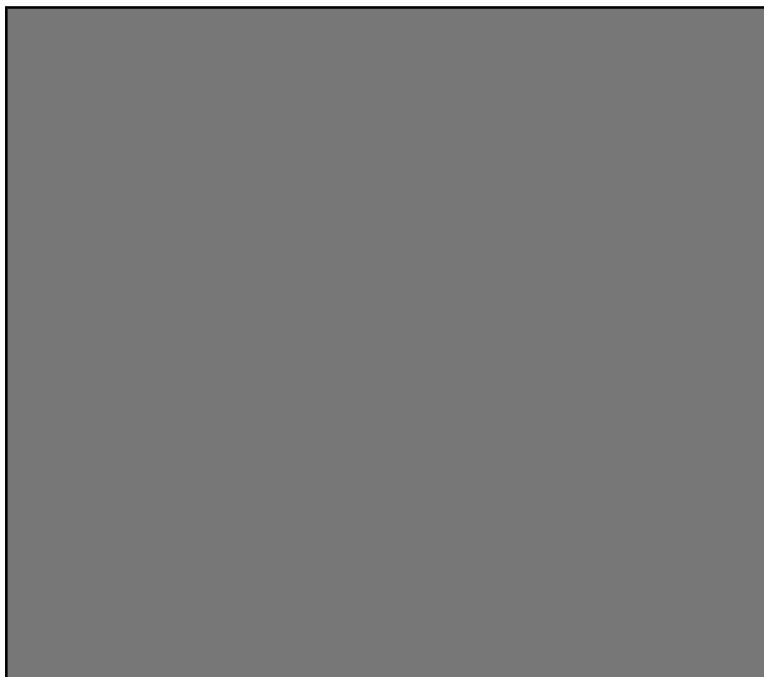
外国と比較した日本の英語力向上について ～英語も強い三高生になるために～

本研究では、日本と外国の英語教育の違いに着目し、英語教育比較を行うことで日本人の英語力の向上には何が必要なのかを探究した。近年英語の需要が高まってきているなか、自らの英語力の低さを実感したため、この探究テーマを設定した。英語教育の盛んなスイスで「バカロレア教育」という教育プログラムが実施されていることを知り、バカロレア教育に視点を絞って探究を進めた。探究を進めるうちにバカロレア教育は教養のためのプログラムであり英語教育とイコールではないことがわかったが、その充実した教育内容により高い批判的思考力とコミュニケーション能力を養うことができる。そのため、この教育プログラムからヒントを得ることで日本の英語教育がさらに良いものとなるだろうと考えた。日本の英語教育はテスト対応型であるため、海外での実用的な英語力・コミュニケーション能力という点では課題が多い。この課題を解決するには3つの項目で構成される「言語の学び」を行い、英語能力の4技能5領域をバランス良く身につけることが重要になってくる。その中で、単にその言語を使用するというのではなく、他の教科の学習もその言語を使って行う「イマージョン教育」に最も注目し、最終的には「対話・文法・イマージョン教育」による三高生向けの授業構成を提案する。

キーワード: 英語教育比較、バカロレア教育、言語の学び、4技能5領域、イマージョン教育

I. はじめに

現代社会ではグローバル化が急速に進み、英語の需要も高まってきている。学童などで英語の学習を始めているところもあり、幼少期から英語に触れることが推奨されているようだ。私達が社会に出る頃には、より活躍するために外国人ともコミュニケーションを積極的にとることが重要になってくるだろう。そのような状況の中で、高校1年の時に受けたGTECで自分の英語の弱さ、特にスピーキング能力の低さに改めて気づき危機感を覚えた。同様に考えていた2人と班を組み、日本人の英語力の向上には何が必要なのか探究を始めた。

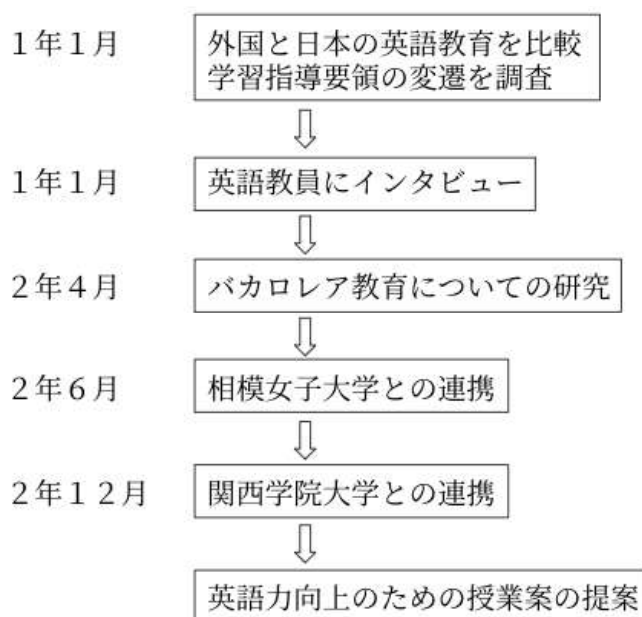


II. 研究方法

はじめに、英語力が低いと言われる日本の英語教育には、英語を母国語としない外国の英語教育とどのような違いがあるのかを調査する中で特にスイスとノルウェーで英語教育が盛んと知り、その教育内容・方法について詳しく調査を行った。同時進行で、現代の高校生の英語力に何が必要とされているのかを知るために日本の高校英語の学習指導要領の変遷についても調べ、指導要領が変化した理由や高校英語教育の目標などを把握した。次に高校生全体から私達三高生に目を向け、三高生には英語力の何が足りないのかを把握するために三高の英語教員にインタビューを行った。外国との比較を進める中で「バカロレア教育 (IB)」という教育プログラムの存在を知り、その概要・教育方法などを詳しく調べた。その後、バカロレア教育についてより深く知るために相模女子大学の赤塚先生とズームでディスカッションを行い、日本の英語教育の現状・問題点なども合わせて知ることができた。さらに修学旅行の際には、関西学院大学のIB教員養成プログラム特別任期制教授・井藤先生とディスカッションを行い、日本の英語教育が弱い歴史的背景や英語力を高める方法などを教えていただいた。最後にここまでの研究内容を踏まえて、高校生の英語力を向上させるにはどのような授業をする必要があるのかを考え英語力向上のための授業案を提案した。

III. 研究過程

表1 研究概要



1. 外国との比較研究

実施月	研究内容	結果
1年1月	外国と日本の英語教育を比較	ノルウェー ・実践的な早期英語教育 ・日常生活で英語多い スイス ・多様な言語と教育システム ⇒グローバルな視点の育成
1年1月	学習指導要領の変遷	・コミュニケーションの基盤形成 情報や考えを的確に理解・表現・伝達 外国語を使用する上での目標を明確化 ・「論理・表現」の追加 ・高校卒業までに覚えるべき英単語2000語増加
1年1月	英語教員にインタビュー	長所 ・読解力やスピーキング能力が高い ・発表スキルが高い 短所 ・文法、語法、語彙力が足りない ・回答、英文を読むスピードが遅い
2年4月	バカロレア教育 (IB)	・1968年にスイスのジュネーブで成立 ・国際バカロレア機構が提供する教育プログラム ・10の理想像を掲げる
2年6月	相模女子大学と連携	日本の英語教育の課題 ・語彙力や英語を用いた表現力が必要 ・英語で考えて英語でアウトプット ・文法力を活用する力が弱い IBについて ・タイムマネジメント能力・批判的思考を養う ・人によって向き不向きがある
2年12月	関西学院大学と連携	日本の英語教育の課題 ・日本の英語教育はテスト対応型 ・英語教育の開始が遅れた ・言語の本質的な学びを見つける必要がある IBについて ・英語教育≠IB教育
/	授業案を提案	・対話(授業内で英語を使う意識) ・文法(「言語を学ぶ」) ・イマージョン教育(言語で学ぶ)

○日本の英語能力レベル

まずはじめに、自分たちの英語力が低いという事実から日本全体の英語力はどうか調べた。その結果、日本の英語能力レベルが113カ国中80位とかなり低い水準であることがわかった。(図1) 日本の英語能力レベルが低いことは英語教育になんらかの問題があるのではないかと考え、私たちは北欧のなかでも英語教育が盛んなノルウェーとスイスに着目し英語教育の違いについて探究を進めた。

○ノルウェー・スイスとの比較

日本とノルウェー・スイスの英語教育を比較したところその違いは明らかであった。まず大きな違いは開始時期にある。日本では小学4年生頃に英語教育を始めるのに対して、ノルウェーでは小学校入学後す

くに、スイスでは小学2年生で英語教育を始める。また、内容の違いも大きく、日本は最初に読み書き中心で学習するがノルウェーでは会話中心でコミュニケーション能力の育成に重きをおいている。スイスでは「バカロレア教育」という教育プログラムが盛んであることに加え、公用語は4つあることから多様な言語と教育システムによりグローバルな視点の育成が目指されていることがわかった。

図1 日本、スイス、ノルウェーの英語能力レベル

2. 高校生に求められている英語能力

次に日本に視点を戻し、現代の高校生にはどのような英語能力が求められているのかを知るため、外



国語の学習指導要領について調査した。そのなかで平成30年に変更された部分に注目してみると、「話すこと・書くことの活動が適切でない」「やりとり・即興性を養う活動が十分でない」「読んだことについて意見を述べ合うなどの複数の領域を結びつけた活動が適切でない」という3つの課題を受けて、平成30年3月30日からは「コミュニケーションの基盤を形成する姿勢」「情報や考えを的確に理解・表現・伝達するためのコミュニケーションを図る」「外国語を使って何ができるようになるかを明確にする」という内容に変更されていた。

また、「論理・表現」の授業も追加され、ディベート・ディスカッションを行うことにより4技能の英語を実践的に用いることで発信力の育成を目指すことも重要視されている。

高校卒業までに覚えるべき英単語も3000語から4000～5000語に最大2000語増加していることがわかった。学習指導要領の変遷の調査を担当した個人として考察すると、この調査の結果から現代の高校生に求められている能力は、「他者との的確に意見交換を行い、より良いコミュニケーションを追求すること」と言えるだろう。

3. 三高生の現状

高校生全体に求められている能力を理解したため、次は私たち三高生に限定して目を向けた。三高生には英語力の何が足りないのかを把握するために三高の英語教員にインタビューを行った結果、長所としては読解力やスピーキング能力が高いこと、発表スキルが高いことが挙げられた。短所としては文法・語法・語彙力が足りない、回答・英文を読むスピードが遅いことが挙げられた。

4. バカロレア教育

次に、外国との比較研究の際に知った「バカロレア教育」について担当し、概要を詳しく調査した。バカロレア教育とは1968年にスイスのジュネーブで成立した、国際バカロレア機構が提供するチャレンジに満

ちた総合的な教育プログラムで、世界の複雑さを理解してそれに対処できる生徒を育成し、未来へ責任ある行動をとるための態度とスキルを身に付けさせることが目的である。バカロレア教育には10の理想像(図2)があり、これらを身に着けた生徒を育成するために教育を行っている。また、年齢ごとにPYP、MYP、DP、IBCPの4コースに分類されていて、各年齢にあった教育内容が施されている。(図3)日本の英語教育との違いによりバカロレア教育は日本ではまだ主流ではないがここ数年で着々と認定校が増加している。(図4)



図2 バカロレア教育の10の理想像
 図3 バカロレア教育の4つのコース



日本国内の国際バカロレア (IB) 認定校等数の推移

資料 2-3

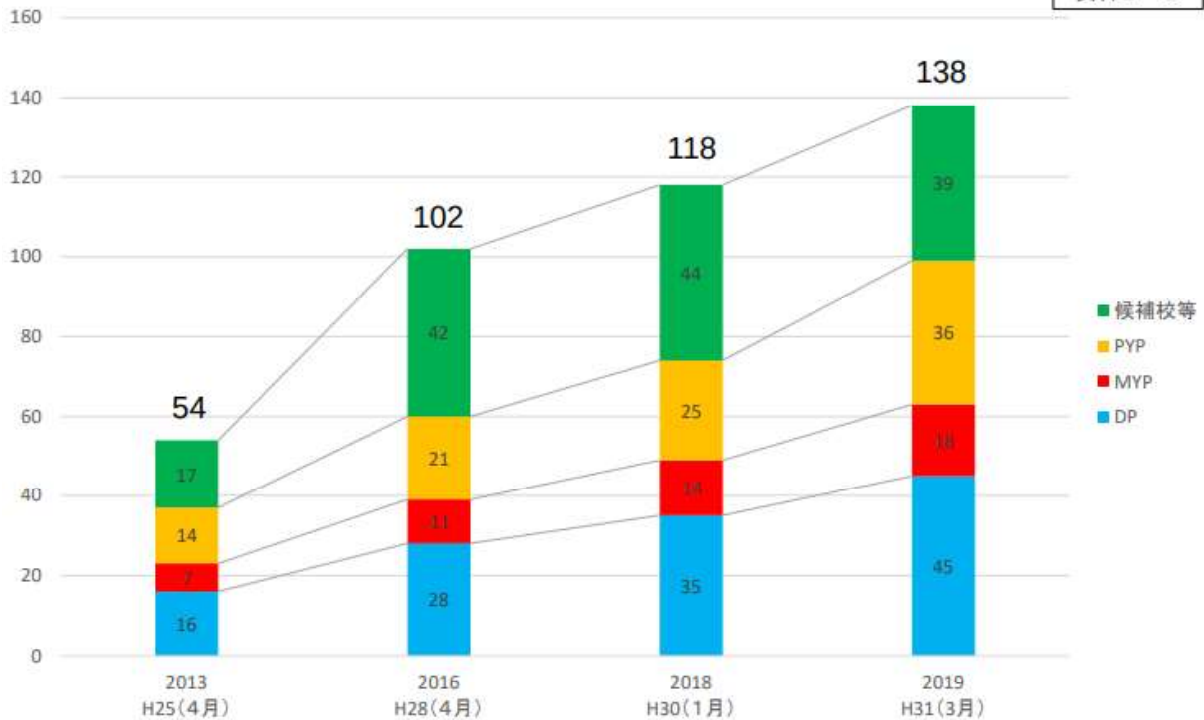


図4 日本のバカロレア認定校

ここまでバカロレア教育と英語教育を関連付けて述べてきたが、探究を進めるうちにバカロレア教育と英語教育はイコールではないことがわかった。バカロレア教育は教養のためのプログラムであり、英語教育のためのプログラムではない。このことを念頭に置きながら、バカロレア教育が掲げる10の理想像が日本の英語教育に足りないことなのではないかと考え、日本の英語教育に活かせる思考のヒントを得るため更に探究を進めた。

5. 相模女子大学との連携

バカロレア教育について深く理解するため、バカロレア教育を研究している相模女子大学の赤塚先生とZoomでミーティングを行い、私達がバカロレアについて調べたことに補足でお話をいただき、日本の英語教育についても先生の見解を教えていただいた。

○日本の英語教育の特徴

日本の英語教育の特徴は、『英語を学ぶ』形の授業であるため『英語で学ぶ』ことを重視していない』ということだ。語法・文法などをテスト対策で学ぶばかりで英語を使って物事を学ぶことをしていなければ、思考力・表現力は伸びない。

○日本の英語教育の課題

このことを踏まえて先生の考える日本の英語教育に足りないことは、語彙・表現力を身につけるために、英語で考えて英語でアウトプットすることだ。日本語で考えてから英語に訳すことを続けていても根本が日本語であるためなかなか表現力は伸びない。英語で思考して英語で発言することが英語力向上には

必要であると考えられる。また持っている文法力を活用する力が弱いことから、新聞やニュース、論文などの様々なテキストジャンルを用いるべきであるとも考えられている。

○バカロレア教育による違い

次にバカロレア教育を受けている生徒と受けていない生徒の違いは、「批判的思考能力の高さ」であり、様々な問題について与えられたことを鵜呑みにするのではなく、疑いの目を向けさせることで批判的思考力の育成に力を入れていることがわかった。また、バカロレア教育には生徒の性格によって向き不向きがあるということもわかった。バカロレア教育は対話的な活動を通して思考力を身につけるプログラムであるので、話を聞いて理解する形の授業が得意な生徒には合わず、一概にバカロレア教育を受けるべきとは言えないというお話もいただいた。

6. 関西学院大学との連携

修学旅行で関西方面を訪問するにあたり、関西学院大学のIB教員養成プログラム特別任期制教授で元英語教師の井藤先生とディスカッションを行い、さらに探究を進めた。

○日本の英語力の弱さ

先生の考える日本の英語力の弱さの原因として、「現在の日本の英語教育はテスト対応型であり、世界で通用するような実用的な能力を高めるものではない」「歴史的な原因として日本の英語教育の開始が遅かったこと」の2つが挙げられた。戦後に日本語教育が発展したことにより日本の論文なども日本語のまま流通が可能になった。世界で日本語が通用したことで英語を勉強する必要がなく、日本での英語教育の開始・発展を遅らせたと考えられる。

○言語の学び

次に先生の考える英語教育と現状について述べる。「言語の学び」には3種類あり、まず1つ目が語法・文法などの『言語を学ぶ』。2つ目がイマージョン教育などの『言語で学ぶ』。イマージョン教育とは他教科も英語で行うなどして、英語だけに囲まれて過ごす時間を少しでも多く設けることで英語に慣れ親しむ時間を増やす教育方法であり、バカロレア教育でも実施されている。そして最後が、批判的思考を養う『言語を深く学ぶ』である。現在の日本は1つ目の「言語を学ぶ」しかできていないため、どうしてもテスト対応型になってしまい実用的な英語能力の育成には繋がらない。世界で通用する英語を身につけるには言語の本質的な学びを見つける必要があるといえる。また、バカロレア教育が養う高い思考力や批判的思考を身につけることで、日本の英語教育に不足している部分を補い、日本の英語教育の質が高まるとも考えられる。

7. 授業提案

以上のことから高校生の英語力を高めるための授業内容を提案する。従来の英語教育に加え、三高生の課題である文法・語法を詳しく学ぶことと、バカロレア教育の長所であるイマージョン教育を掛け合わせることで、英語力向上のためにより良い授業になると考えた。

○対話

まず、質の良い対話を行う時間を多く設ける。教科書に関する内容から直接関係のない内容まで、短い対話時間を授業中に何度か設けることでコミュニケーションの機会を増やす。

○文法

英語教員へのインタビューで三高生の課題として挙げられた、文法・語法を詳しく学ぶことも重要だと考

える。小テストを定期的に行い基礎の徹底的な定着を目指すことで三高生に不足している知識技能の分野を補う。

○イマージョン教育

バカロレア教育の長所のひとつであるイマージョン教育を行うことも提案する。英語の授業を英語で受けるだけでなく、他教科の授業も英語で受けることで日常的に英語に触れる機会を増やすことを目的とする。

8. 探究成果

日本人に足りない英語能力を補うために、日本の英語教育と外国の英語教育の長所を掛け合わせることで日本人の英語の良さも活かしつつ、よりグローバル化に対応できて実用的なコミュニケーションの手段としての英語を身につけられるような授業提案を行うことができた。

IV. 考察

1. 外国と比較した日本の英語教育の特徴と課題(個人考察)

日本の英語教育は文法・語法に重きをおいた教育方法であるため、日本人は文法力に関しては比較的高いと考えられる。これは日本の英語教育において良い点でもあるが課題とともなうことができる。日本人は持っている語彙力を最大限に活かして英語をアウトプットし、コミュニケーションを行うことを苦手としている人が多いだろう。他国ではクラスメイトに外国人が複数人いたり、公用語が多数あったりと日本よりも多言語に触れる機会が多いため、自然とコミュニケーション能力が養われるのではないかと。対して日本は他国に比べて身近に外国人がいないため英語の使用が必要となる機会が少なく、英語を使ってのコミュニケーション能力の向上もなされていないと考える。日本の英語教育のように文法を細かく学び正確性を求めることも重要だが、日常生活で不足している英語をアウトプットする時間を授業で補う必要があると考察した。

2. バカロレア教育が浸透しない理由(個人考察)

ここまでバカロレア教育について探究してきた教養に良い教育プログラムだということがわかったが、なぜここまで日本に浸透していないのか。近年認定校は増えてきているがより早い段階で日本に浸透していても良いはずだ。私はバカロレア教育が日本に浸透しない理由を3つ考察した。1つ目は高い費用がかかることだ。レベルの高い教育を受けるには金銭面に影響が出るのは当然のことだが、保護者の負担が大きくなってしまったため理由としては十分に考えられるだろう。2つ目は難易度が非常に高いプログラムであることだ。そのため、授業についていけずに自信をなくしストレスをためてしまう生徒が多いのではないかと考えられる。そして最後に、バカロレア教育のすべてが日本人の性格に合っているとは言えないことである。バカロレア教育の求める理想像が、外国人と比べて控えめな性格である日本人の特性から考えてレベルの高すぎるものであったり、自発的な活動よりも教師の話聞くことで理解を深めるほうが得意という生徒も日本には多いと考えられるだろう。以上の3つがバカロレア教育が日本に浸透しにくい理由だと考える。

3. 三高生に適した英語教育方法(班考察)

私たちの考える三高生に適した英語教育方法は3つある。まずは質の良い対話を行う時間を多く設けることだ。対話の時間の設定は現在の授業でも行われているが、現状として、伝えたいことを英語に言い換えることができないときに、諦めて日本語を使ったり、会話中にもかかわらず辞書を使ったりしてしまう生徒が見受けられることが多い。これでは即興性・コミュニケーションを重視している「対話」としての意味

をなさない。英語がわからなくても自分の持っている語彙で補い、諦めず相手に伝えようと努力することが大切だと考える。コミュニケーション能力を養うことでバカロレア教育の理想像のなかの「コミュニケーションができる人」に近づくことができるはずだ。2つ目は「言語を学ぶ」という意味で文法・語法の基礎定着を徹底的に行うことだ。日本単位で見たときは日本人の文法力は高いほうだが、本校の英語教員にインタビューを行った際には三高生の課題として語彙力が低いことが挙げられたため従来の日本の英語教育そのまま文法・語法の学習によりの向上にも努める。小テストやライティングの定期的な実施を行うことで基礎を養う。そして3つ目が「言語で学ぶ」の、イマージョン教育の実施である。英語の授業以外で英語に触れる機会が少ないと、どうしても英語への親近感が湧かないのではと考え、他教科も英語で行うイマージョン教育を取り入れることで英語に触れる機会を増やし英語力の向上を目指す。

4. 今後の課題

はじめは授業案を提案し実践までする予定で探究活動を進めていたが、時間の関係で実践まで行うことができなかった。そのため考えた授業案が高校生にとって本当に良いものなのか、改善点はあるかなど見つけることができているので、今後実践は行えずとも改善点などは考えていきたい。

V. おわりに

このテーマで探究を行うにあたって自分の英語力や勉強方法を客観的に捉え直すことができた。日本の英語教育の課題は同時に自分の課題でもあり、課題が挙がる理由や改善の方法などを考えることで「日本人の英語」と「三高生の英語」の2つだけでなく、「自分の英語」のことも深く考えるきっかけとなったと思う。もともと英語が苦手ではじめはこのテーマで探究を進めることに不安を感じていたが、探究が進んでいくうちに英語が苦手だからこそそのやりがいを感じた。これからは今まで以上に英語を積極的に使い、対話の時間では日本語に逃げることをないように心がけていきたいと思う。

VI. 謝辞

本研究を進めるにあたり、都留文科大学教養学部国際教育学科教授 原和久教授には、バカロレアに精通した教授御二方のご紹介と温かいご助言をいただきました。心から感謝いたします。また、関西学院大学教職教育研究センター IB教員養成プログラム特別任期制教授・井藤眞由美教授、日本国際バカロレア教育学会編集委員兼相模女子大学教授・赤塚祐哉教授にはバカロレア教育と日本の英語教育についてご助言を多くいただき、探究活動をより良いものにすることができました。本当にありがとうございました。

VII. 参考文献

EFエデュケーションファースト

[世界最大の英語能力指数 ランキング](#)

カシオ教育情報ステーション 2019年11月7日

<https://edu.casio.jp/edu/edu26/>

文部科学省

[3. 教育課程の編成:文部科学省](#)

世界の暮らしをもっと身近に せかいじゅうライフ 2019年10月3日

[ノルウェーの教育制度](#)

Meiko English Lab 2022年7月25日

[日本の英語教育の問題点は？国際比較とこれまでの変遷について紹介](#)

株式会社海外教育研究所

[国際国家スイス](#)

文部科学省 IB教育推進コンソーシアム

[IB\(国際バカロレア\)とは | IB教育推進コンソーシアム](#)

文部科学省IB教育推進コンソーシアム事務局 2019年3月

[国際バカロレアについて](#)

<https://www.ibo.org/globalassets/new-structure/brochures-and-infographics/pdfs/what-is-an-ib-education-2017-jp.pdf>

外国と比較した日本の英語力向上について

4 君の英い教育をみんなに



宮城県仙台第三高等学校 探究2班

日本の英語教育の現状

〈外国との比較〉

英語教育の盛んな北欧に注目！

○ノルウェー



実践的な早期英語教育
＆日常生活でふれる英語の多さ

○スイス



多様な言語と教育システムによる
グローバルな視点の育成

高校英語教育の現状

〈学習指導要領〉

○コミュニケーションの基礎形成
情報や考えを的確に理解・表現・伝達
外国語を使用する上での目標を明確化

○高校卒業までに覚えるべき単語が
2000語増加

○論理・表現
【ディベート・ディスカッション】

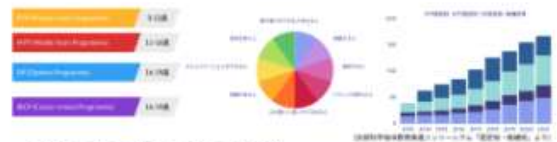
〈三高60回生〉

○本校の英語教師の先生に三高60回生の
英語力についてインタビューを実施
⇒基礎となる4技能5領域すべてを
身につけることが課題

バカロレア教育

〈バカロレア教育の事前学習〉

・1968年スイスのジュネーブで成立した
・国際バカロレア機構が提供
・チャレンジに満ちた総合的な教育プログラム



〈バカロレア教育≠英語教育〉

教養のためのプログラムであり英語教育のためのプログラムではない

●バカロレア教育が目指す10の理想像
＝日本の英語教育に足りないこと？



バカロレア教育から日本の英語教育に活かせる思考のヒントを得る

相模女子大学と関西学院大学との連携

〈相模女子大学〉

○日本の高校英語教育の特徴

→『英語を学ぶ』形であるため『英語で学ぶ』ことを重視していない
⇒語彙力や英語を用いた表現力が必要！

○日本の英語教育に足りないこと

→英語で考えて英語でアウトプット
⇒語彙・表現力が身につく

→文法力を活用する力が弱い

⇒様々なテキストジャンルを用いるべき

○IBを受けている生徒の違い

→タイムマネジメント能力・批判的思考

○IBの向き不向き

→IBは対話的な活動を通して思考力を身につけるプログラム
⇒話を聞いて理解する形の授業が得意な人もいる
⇒人によって向き不向きがある

〈関西学院大学〉

現状

日本の英語教育はテスト対応型
世界で通用する能力を高めるものではない

↓原因

英語の需要度が低く英語教育の開始時期が遅れた

↓IB教育って？

英語力向上・人間性を養う教育プログラム

↓英語教育≠IB教育ではない

↓4技能を高めるために

言語を学ぶ (文法)
言語で学ぶ (イメージ教育)
言語を深く学ぶ (批判的思考)

現在の日本では
「言語を学ぶ」
しかできていない

↓言語の本質的な学び

IBが養う高い思考力 (批判的思考)
→日本の英語教育に足りない部分と合致

日本の英語教育×IB教育の実現

まとめ

三高生に合った英語の学習方法と効果

対話 (授業内で英語を使う意識)

→コミュニケーション能力の向上によりバカロレア教育が掲げる理想像につながる

文法 (「言語を学ぶ」)

→基礎定着により60回生に不足している知識技能を補う

イメージ教育 (言語で学ぶ)

→英語に触れる時間を少しでも長く持つことで英語に親しみを持つことができる

関連文献

IBとEFL/ESL教育の統合的アプローチ
言語教育の質を高めるための実践的アプローチ
[平成30年発行] 英語 平成30年7月 英語
読書 年次集

IBとEFL/ESL教育の統合

ノルウェーの英語教育

英語教育の未来



